

昭和49年3月1日発行〈毎月1回1日発行〉
昭和39年2月25日国鉄東局特別扱承認雑誌第1784号
昭和39年3月18日第3種郵便物認可

現代の理論

マルクス研究の 新段階

●特集●マルクス研究の新段階

「ドイツ・イデオロギー」と疎外・物象化の理論

沖浦和光＋重田晃一＋細見英十森田桐郎＋望月清司

労働と所有の分離(上) 表 三郎

マルクス主義と労働 磯 和男

〈連載講座〉経済学Ⅷ 正村公宏

追悼 梅本克己

石油危機と 世界・日本資本主義

●特集●石油危機と世界・日本資本主義

石油危機と世界・日本資本主義

白石忠夫＋富館孝夫＋富塚文太郎＋葉山栄一

七四春闘と労働運動の転換

河村正次郎＋久保孝雄＋高田佳利＋正村公宏

労働と所有の分離(下) 表 三郎

マルクス主義と労働(中) 磯 和男

〈連載講座〉経済学Ⅹ 正村公宏

昭和49年4月1日発行〈毎月1回1日発行〉
昭和39年2月25日国鉄東局特別扱承認雑誌第1784号
昭和39年3月18日第3種郵便物認可

現代の理論

労働と所有の分離 (上)

—マルクス階級論の核心は何か—

序

マルクスの原像を再構成するといった視角からの研究は今や極めて盛んである。文献的精密化、種差選別のカテゴリーの彫琢等の作業は着々となされつつある。また極めて大きな構想をもった、マルクス全体像の復元をも計られているようである。かくのごとき研究の進展状況をもたらしたものが、スターリン主義それ自体の自己解体とそこから湧出してきた△自由▽と△模索▽にあったことは周知のことであり、そのこと自体は、われわれの前進の契機として慶賀されもしよう。だが、この自由や模索は一体、何処へ向かっているのだろうか。資本主義ならびに社会主義が極度に高度化し、ます

表 三 郎

(桃山学院大学講師)

ますその原像から偏奇し拡散していくにつれて、われわれのマルクス原像(ワアビルト)も、いかえれば革命原像も、ますますあの巨大さ、人類史を資本主義を基軸にして、前史・後史として分節・透視しえたあの巨大さをも深遠さをも失なって、そこから偏奇し、縮少し、腐廃化の過程をたどる現代世界に丸ごとのみこまれようとしているのではないか。このようなことをいうのは、マルクス原像復元の試行のうち、まさにマルクスの一生を賭けた課題であったはずの△階級論▽、これが欠如しているかのようだからである。あるいはそれは周知の前提なのかもしれないが、私のみるところ、むしろマルクス階級論は「階級二元論」(平田清明氏)として排除され、あるいは「社会主義的イデオロギーの混入」(宇

野弘藏氏)として除去されて、階級論の彼岸にマルクス原像(虚像でなければよい)を定立されようとしているかのようである。情況論としていえば、高度資本主義ならびに世界の三極化構造の階級解体状況に見あった没階級論とも思えるふしがある。

一八四八年二月革命の激動と運動解体のあと、再び年来の「経済学批判」の仕事に取らるかろうとしていたその頃、マルクスは一友人に階級論と自己の研究との関連を、次のように説明した手紙を書きおくっている。すなわち「近代社会における諸階級の存在」や「諸階級相互間の闘争」の発見は、マルクスの功績ではなく、「ブルジョア歴史家」と「ブルジョア経済学者」のものであって、彼の「新たにおこなった」功績は「(1)諸階級の存在は生産の一定の歴史的發展段階とだけ結びついているということ、(2)階級闘争は必然的にプロレタリアート独裁に導くということ、(3)この独裁そのものは、一切の階級の廃止への、階級なき社会への過渡期をなすにすぎないということ、を証明したこと」だと(マルクスからヴァイデマイアーへ、「一八五二年三月五日」MEW. 28. s. 507~508)。だとすれば、マルクスの生涯を奪い取ってしまった当の研究たる「経済学批判」が、如上の三案件と切り離しがたく、緊密に結びついたものだとということ、これは疑念をさしはさむ余地のない事柄であるはずだ。実際、彼の『経済学批判』が、その課題を、「生産の一定の歴史的發展段階」の一つで

それは何をするかを余儀なくされているか、これを何ものをも恐れることなく、まさに批判的に描き切ることなのだ。マルクスにそれを可能ならしめたものは、いうまでもなく、弁証法、それも「現状の肯定的理解のうち同時にまたその否定、その必然的没落の理解を含み、いっさいの生成した形態を運動の流れのなかでとらえ、したがってまたその過ぎざる面からとらえ、なにもものにも動かされることなく、その本質上批判的であり革命的である」(MEW. 23. s. 28)弁証法であった。

だとすれば、マルクスの原像、原思想(ウアデンケン)の復元・再構成は、階級存在論(階級意識論や階級の自覚論ではなく)を、まさに基軸としてなされねばならないのであって、これを欠如した「市民社会論」、「物象化論」、「依存関係論」、「三段階論」の試みは、マルクスの原像とは何の関係ももたないであろう。虚像の擁立——支配的思想としての支配階級のイデオロギーへの屈服——、これがその帰結である。

マルクスの原思想は、とにかくあらゆる先入見をすて、その全作品を破してみればよくわかるが、驚くほどの首尾一貫性をもって『経済学・哲学草稿』(一八四四年)にいたるまでの「批判」の姿容についてはすでにのべたところだが、この『草稿』での「経済学批判」は、資本関係(「国民経済的状态」)を、「私的所有」と「疎外された労働」との

ある「ブルジョアの生産諸関係」を研究し、この関係こそがまさに「近代市民社会が分かれている三つの大きな階級の経済的生活条件」であり、こうしてまたこの関係は「社会的生産過程の最後の敵対的形態」であること(MEW. 13. s. 7~9)の証明あるいは論証に依っていたことは、その「序言」から十分に明らかである。そのうえ、マルクスの果たした事は、たんに「階級の経済的生活条件」の闡明ではなく、この生活条件が階級闘争の必然性とその闘争の行きつかざるをえない場所の闡明にあることもまた明白たる事柄であるはずだ。というのも「階級の実在」を「政治的特権や独占」と結びつけたりすることなく、階級闘争の「経済的解剖学を叙述した」のは、「ブルジョア経済学者たち」であって、マルクスではないからである。ここに、「何故「経済学」ではないの理由がある。「批判」とは何なのか。それが「一つの階級を代表」するものたるかぎり、マルクスの「経済学批判」こそは、「資本主義的生産様式の変革と諸階級の最終的廃止を自分の歴史的使命とする階級——プロレタリアート——だけ」を代表する」(『資本論』序文、MEW. 23. s. 24)ものである。しかもこの「階級を代表する」ことは、「プロレタリアートの立場に立つ」(党派性イデオロギー)ことや、「徹底した科学の立場、つまりは人類の立場に立つ」(科学的客観主義)ことを意味するのではなく、「プロレタリアートとは何か、

「二要因」の相互関係の展開としてとらえ、こうして「労働」と資本、資本と土地とが分割される根拠Grund der Teilung」いいかえれば「私的所有、所有欲、労働と資本と土地所有との分離 Trennungのあいだの本質的連関」(MEW. Erg. 1, s. 510, 511)を概念的に把握しえたのであった。この『草稿』以降のマルクスの「批判」の歩みは、ここで別決された資本・賃労働の同一性と分離を、「労働」の根底的構造把握を基軸として、より一層徹底して展開していくことにほかならなかったのである。マルクスの原思想とは、一言でいえば、近代社会の階級関係を、「客体的労働諸条件と主体的労働力との分離」すなわち「対象化された労働と生きた労働との分離」、いいかえれば「所有と労働との分離」として根底的に把握するところにある。全マルクス思想体系は、ここに発出し、ここに還帰する。「客体的労働諸条件と主体的労働力との分離」、これがマルクス思想のアルファであり、オメガである。本稿は、このマルクスの忘れられた原思想の基本軸を可能なかぎり詳細に解明し、これまでの「疎外論」、「市民社会論」、「社会科学としての経済学」の何が誤謬であるかの批判的根拠を提示して、「主体的労働力」の担い手としてのプロレタリアートとは、一体何か、また何をなすべく余儀なくされているのか、これを闡明することを目的とする。その際の主たる原資料は、かの『経済学・哲学草稿』(一八四四年)と『資本論』(一八六七年)とを、経済学批判としても「一ゲ

ル哲学批判としても、外延的・内包的に結合せしめている当
 のものを最も明らかにした『経済学批判要綱』(一八五七―八
 年)、これである。

一、客体的労働条件と主体的労働力の分離

マルクスの人類史の三段階説は、いまでは周知のことから
 であるが、なおいまだにエンゲルスの三段階説、つまり無
 階級社会(共同体)―階級社会―無階級社会(共同体)が、
 あるいはテニエニエの三段階説(ゲマインシャフト―ゲ
 ルシャフト―ゲマインシャフト)が巷に氾濫しているところ
 からすれば、近代市民社会の階級社会としての種差たる「勞
 働と所有の分離」がもつ意味をとらえざるためにも、この三
 段階説の検討からはじめなければならぬ。マルクスはこう
 のべている。

「人格的依存関係(はじめはまったく自然発生的な)が第
 一の社会形態であり、そこでは人間の生産性はたゞごく小
 範囲でまた孤立した地点でだけ発展する。物象的依存性の
 うえにすぎずかれた人格的独立性は、第二の大きな形態であ
 り、そこでは一般的で社会的な新陳代謝、普遍的な諸関
 連、全面的欲望、それに普遍的な力能といった体系が形
 成される。諸個人の普遍的発展のうえに、また彼らの共同
 的、社会的生産性 ihrer gemeinschaftlichen, gesellschaftlichen
 Produktivität を社会的力能として従属させることこのうえに

て新しい歴史的形態で原結合を復活させるまでつづくである
 う」(MEW. 16, s. 131)と。人類史の三段階を区分するマル
 クマールとは、だから、「労働する人間」すなわち直接生産
 者と、「労働手段」すなわち生産諸手段との結合・分離様式
 にあるのである。これら二要因の関係が、「原結合―解体
 」「分離―原結合の復活」という様式上の変化をこうむるこ
 とこそが、まさにマルクスによって人類史の三段階といわれ
 るものなのである。この三段階区分のマルクマールを曖昧に
 したままで、「生産性」の単線的拡大、「関係」の広がり、
 あるいは「個体的人間」の普遍化、さらには、人間・自然関
 係の統一―解体―統一を想定してみたりするのは、マルクスの
 苦闘を嘲弄するものであろう。これらはすべて、部分的に
 は正当なものかもしれない。だが何故マルクスが直接生産者
 と生産諸手段との結合・分離様式を基本軸に据えたのかの根
 拠に思いをひそめることなく、これらが主張されるならば、
 誤謬に転化するのには当然のことであろう。唯物史観公式のい
 わゆる「物質的生产力」も、「労働する人間」と「労働手
 段」との関係をはなれて論ぜられるならば、単なる客観主義
 か単なる主観主義かにすぎない。『経済学批判要綱』のマル
 クスは、物象的依存性のもとでの「普遍的な力能 Vernögen」
 とか、第三段階での「社会的力能 Vernögen」といった言
 葉で、いわゆる「生産力」を説明している。この「力能」
 Vernögen という概念は、のちに詳しくのべるように、「労働

きずかれた自由な個性が、第三の段階である。第二段階は
 第三段階の諸条件をつくりだす」(『経済学批判要綱』, Gr. S.
 75~76.)

ここでマルクスは三段階区分のマルクマールを「生産性」と
 「社会性」の発展においている。とはいえ、第一段階から第
 二段階を区別するものを、明瞭な形で提示しているとはい
 がたい。「人格的依存関係」と「人格的独立(非依存)性」
 を分けるものが、単に量的な生産性でありえないとすれば、
 それは一体何か。この点は一八六五年に書かれた『賃金、価
 格、利潤』のある一節が明確にのべている。第二段階をもた
 らした当のものは、「経済学者たちが『先行的蓄積または原
 蓄積』とよんでいるもので、だがじつは原収奪とよぶべきも
 の」、これである。それは「労働する人間と彼の労働手段と
 のあいだに存在する原結合の解体をもたらし一連の歴史的
 過程」であって、この結合解体こそが、自然発生的で狭隘な
 「人格的依存関係」を打破って、第三段階の「自由な個性」
 を準備する、普遍的、全面的な「物象的依存性のうえにすぎ
 ずかれた人格的独立(非依存)性」をもたらし当のものなの
 である。第二段階が「第三段階の諸条件をつくりだす」点
 を、マルクスはこうのべている。「労働する人間と労働手段
 との分離がひとたび確立されると、こうした状態はおのずか
 ら存続し、つねに規模を拡大しながら再生産され、ついに生
 産様式上の新しい根本的な革命がふたたびこれをくつがえし

働能力」↓「労働力」↓「Arbeitskraft」と発展させられるもので
 あって、「可能性 Möglichkeit」あるいは「潜勢力 Potenz」と深く
 かかわりあった概念なのである。それはひとまず置いて、こ
 こでもう少しマルクスのいう直接生産者と生産諸手段との結
 合・分離様式がどれほどの深さと広さを持っているかを検討
 しておこう。

「不払剰労働が直接生産者から汲みだされる独自の経済
 的形態は、支配・隷属関係を規定するが、この関係は直接
 に生産そのものから生まれてきて、それ自身また規定的に
 生産に反作用する。しかしまた、この関係のうえには、生
 産諸関係そのものから生じてくる経済的共同体の全姿容が
 築かれたと同時に、その共同体の独自の政治的姿態も築か
 れる。生産諸条件の所有者の直接生産者にたいする直接的
 関係―この関係のそのつどの形態は当然つねに労働の仕
 方の、したがってまた労働の社会的生産力の、一定の発展
 段階に対応している―、この関係こそは、つねにわれわ
 れがそのうちに社会的構造全体の、したがってまた主権・
 従属関係の政治的形態の、要するにそのつどの独自の国家
 形態の、最奥の秘密、隠された基礎を見いだすところのも
 のである。このことは、同じ経済的基礎―主要条件から
 見て同じ基礎―が、無数のさまざまな経験的事情、すな
 わち自然条件や種族関係や外から作用する歴史的影響など
 によって、現象上の無限の変異や色合いを示すことがあり

うるということを防げるものではなく、これらの変異や色合いはただこの経験的に与えられた事情の分析によって理解されるのである」(『資本論』第三卷、MEW. 25, s. 799~800.)

ひとはこれを読んでただちに唯物史観の公式を思いださないうらるか。かの公式でいわれている「實在的土台」としての「社会の経済的構造」を形成する「生産諸関係の総体」の中軸、その最も根本的な関係こそ、ほかならないここでいわれている「生産諸条件の所有者の直接生産者にたいする直接関係」なのである。マルクスは周到にも、基本的関係と無限の色合いを示す現象形態とを明確に区分している。これは科学にたずさわるものの当然の姿勢であるが、教条主義(教条の真意を知らない教条主義)と現象主義(無限の色合いから得手勝手に「体系」や「理念」をデッチあげる空想主義)のうずまくマルクス解剖学の世界にあっては、この基本的関係のもつ重量を充分にはかりきらねばならない。そもそもマルクスは、直接生産者と生産諸手段との結合・分離様式すなわち「生産諸条件の所有者の直接生産者にたいする直接的関係」が基本軸だといった視角はどこから得てきたのだろうか。それは「労働する人間と労働手段との分離」が支配する近代社会の徹底的分析によってなのである。マルクスにとって問題なのは分離であって結合ではない。「生きて活動する人間と、彼らが自然とのあいだに物質代謝をするさいの自

然的・非有機的諸条件とのあいだの統一、Einheit、したがってまた人間による自然の領有——こうしたことは説明を要することでもないし、また歴史的過程の結果でもないものであって、むしろ人間の定在のこれら非有機的条件とこの活動する定在とのあいだの分離、Trennung、賃労働と資本との関係で完全なものにはじめて措定されるような分離こそが、説明を要し、また歴史的過程の結果なのである」(Gr. s. 386)ブルジョア経済学者たちのように、この分離、原結合の解体を、あたかもキリスト教の原罪のごとく前提してしまつてはならない。この分離を前提するところからは歴史は歴史として見えてはこない。むしろ歴史が自然と見え、自然が歴史と見え、倒錯が生まれる。古典経済学のおちいった棄である。「労働する人間と労働手段との分離」を歴史的・現存的に徹底して説明してこそ、この分離の歴史的・革命的止揚、つまり原結合の復活も、より明瞭に見えてくるのである。私は教条的に、所有と無所有の対立を主張しているのではない。それはまだ無概念的な表現である。所有は法律的概念であつて、経済的関係に最も近接したものだといえ、あくまで結果である。この所有と無所有の対立からは、労働手段から分離された「労働する人間」いいかえれば「生きて活動する人間 die lebenden und tügen Menschen」の眞の姿をとらえることはできない。むしろ所有と無所有の対立は、近代社会の諸矛盾認識の出発点であつて、直接的現象である。

「所有とは盗みである」とのブルードンのテーゼはたしかに、近代社会主義の生誕をつげるものではあつたが、この直接的現象の地平にとどまつてゐるかぎり、社会主義も結局のところ所有世界を越えることはできず、「眞のブルジョアの所有」についての、ありとあらゆる種類の、自分でもはっきりしない空想にまよいこんで」(ブルードンについで) MEW. 16, s. 27)。ブルジョア社会主義におちこんでいかなければならぬ。マルクス自身がまだブルードンを高く評価し、彼との「長々しい、しばしば終夜にわたつた討論」(同上)に熱中していた頃にすでに、「無所有と所有との対立は、それが労働と資本との対立として概念的に把握されないかぎり、まだ無差別な対立、その内面的関係との活動的な関連においてとらえられていない対立、まだ矛盾としてとらえられていない対立である」(『経済学・哲学草稿』岩波文庫、一三六頁、MEW. Esg. 1, s. 553)という視角を示していたのである。だから眞の問題は、無所有として現存する「生きて活動する人間」の、生産諸条件の所有に対する「活動的な関連」を把握しきるところにある。一言でいえば、生産諸条件の所有から分離された(労働)の、根底的構造把握、これこそが問題なのである。マルクスが「説明を要する」歴史的過程といつたのは、周知のとおり、「本源的蓄積」のことであつて、この本源的蓄積は「一方では社会的生手段・生産手段を資本に転化させ他方では直接生産者を賃労働者に転化させる」「生産者と生

産手段との歴史的分離過程 der historische Scheidungsprozess」(『資本論』第一卷、MEW. 23, s. 742)のことである。この歴史的分離過程は「労働者が所有者であつたり、所有者が労働したりするさまざまな形態を解体する歴史的過程」であり、三状態の解体としてあらわれる。第一に「自然的生産条件としての大地——土地にたいする関係行為の解体」であり、第二に「労働者が用具の所有者として現れる諸関係の解体」であるが、この両関係の前提は、労働者が「生産者として——したがって生産のあいだ、生産の完了するまえに——生活するのに必要な消費手段を、生産のまえに占有しているということ」である。解体はしたがって、労働者にとってこの前提の解体を意味する。さらに第三に「労働者自身、生きてゐる労働力能 die lebendigen Arbeitsvermögen、自身が、なお直接に客体的生産条件のもとに属し、そのようなものとして領有されてゐる——したがって奴隷とか農奴とかである——ような諸関係の解体」(Gr. s. 386)である。この三重の解体にあつて最も根源的なものは、いふまでもなく第一の Clearing of Estates、つまり「農民からの土地収奪」であつた。これを基礎として現出した「人間の大部分が突然暴力的にその生活手段から引き離されて無保護の追放されたプロレタリアとして労働市場に投げだされる瞬間」こそ、まさに本源的蓄積の歴史的、画期的なすものである。「一つの世界史を包括」するものであつた(『資本論』第一卷、MEW. 23, S. 744, u. s. 184.)。

学である。対立物の統一としてある二重性を一面化し、資本・賃労働関係を、生産手段に客体的諸条件、つまり資本の側面からのみ把握し、歴史的分離過程を、スミスのごとく「先行的蓄積あるいは原蓄積」としてのみ、生産諸条件の自立化の、解放の過程としてのみとらえ、こうして原蓄積が「じつは原収奪とよぶべきもの」たることを陰蔽するにいたったのが、古典経済学であった。原蓄積を同時に原収奪として把握しきるものこそ、マルクスの批判的・革命的弁証法である。

△経済学Vと△経済批判Vの対立の根基がここにある。

資本主義的生産は、歴史的に与えられた生産者と生産手段との分離から出発する。しかし、いかに個々の観点から見ても、この生産が生産者と生産手段の分離を止揚するものに見えようと、社会的立場からみれば、すなわち「資本家階級と労働者階級とに目を向け、商品の個別的生産過程ではなく、資本主義的生産過程をその流れとその社会的な広がりとのなかで見るとは」(『資本論』第一巻、MEW. 23, s. 597)。前提された歴史的分離を、現存的にも繰り返し決定するのが資本主義的生産なのである。だから単純流通の部面からして、商品と商品ではなく、貨幣所有者と労働力商品所有者が相対しなければならぬ。だから歴史的にいても論理的・現存的にいても「客体的労働諸条件と主体的労働力との分離 *Scheidung* zwischen den objektiven Arbeitsbedingungen und der subjektiven Arbeitskraft が、資本主義的生産過程の事実的

こうして本源的蓄積＝「原収奪」という資本関係の創造過程は「一方の極では社会的生産手段・生活手段を資本に転化させ、反対の極では人民大衆を賃労働者に、つまり自由な(労働貧民)△近代史のこの芸術作品、des Kunstprodukt der modernen Geschichte に転化させ」たのである (MEW. 23, s. 787～8)。だがここでわれわれは注意しなければならない。本源的蓄積という「生産者と生産手段との歴史的分離過程」は、この二要因のどちらかが消滅する過程ではないということに。生産者が「無保護の追放されたプロレタリア」になるということは、ルンペン・プロレタリアになることを意味しない。ルンペン・プロレタリアであれば、まさかマルクスも「近代史の芸術作品」などと呼びはしないであろう。このマルクスの名づけ方には充分の注意を払わなければならない。

因みに『資本論』フランス語版では、*chef-d'oeuvre de l'art, création sublime de l'histoire moderne* (「芸術的傑作、近代史の崇高なる被造物」といったすつと明瞭なイメージ換起力のある表現をしている。このプロレタリアートの積極性・肯定性を確固として保持しておこう。分離 *Scheidung* は消滅ではない。ここで要求されているのは弁証法である。分離とは、二要因の従来あった「肯定的関連」を否定すること、これである。こうして歴史的分離過程の結果として、生産者(生きて活動する人間)と生産手段は、「おのおのが他のもの」にたいして否定的な関連として現れる」(Gr. s. 402～3)こ

とになる。資本・賃労働関係こそ、だからまさに対立物の統一(相互否定的関連)なのである。われわれはともすればこれを忘れてきたのではあるまいか。革命の必然性を論証することができるか否か(宇野弘蔵氏)に問題があるのではない。問題なのは「目のまえで起こることを了解し、その器官とな」ることである。目前の亀裂をこそ弁証することである。現実の資本関係がいかに無階級化(階級解体化＝市民社会化)現象を呈しようとも、この現実的世界の底の底にある相互否定的関連を読み抜く目をもたなければならぬ。これを見失ったとき、「貧困のなかに貧困だけを見て、そのなかに、やがて旧社会をくつがえす革命的破壊的側面を見ない」幻想家となり、漸進的改良の「もろもろの体系だけをつくっている」空想主義者になり果てるのである(『哲学の貧困』MEW. 4, s. 143)。

そもそも本源的蓄積を、「生産者と生産手段との歴史的分離過程」として把握すること自体が、弁証法的分析によっているのである。つまり「自由な労働者に転化された階級の側からの客体的条件の分離 *Scheidung* は、同様にその対極におけるこの同じ条件の自立化 *Verselbständigung* として現われざるをえない」(Gr. s. 403)ものとして分析することである。

如上のごとく分離を生産手段の消滅、したがって生産者のルン・プロレタリアと解するものが、ブルジョア博愛主義だとすれば、生産手段の「自立化」にそれを一面化するの古典経済

に与えられた基礎であり出発点だったのである。ところが、はじめはただ出発点でしかなかったものが、過程の単なる連続、単純再生産によって、資本主義的生産の固有の結果 *eigens Resultat* として絶えず繰り返して生産されて永久化されるのである。一方では生産過程は絶えず素材的富を資本に転化させ、資本家のための価値増殖手段と享楽手段とに転化させる。他方ではこの過程から絶えず労働者が、そこに入ったのと同じ姿で——富の人的源泉ではあるが、この富を自分のために実現するあらゆる手段を欠如している姿で——出てくる」(同上、MEW. 23, s. 595～6)ことになるのである。資本の連続性を保持させる再生産過程は、こうして前提された資本関係(分離の関係)の絶えず繰り返される措置としてあらわれる。われわれはこの前提的、分離を、ニュートン万有引力の法則における始元点の神の手のごときものとして表象してはならない。原罪として分離を表象するのは、まだ分離を根底的に止揚しえない次元での分離の批判でしかない。分離は自立化ではない。「物象的依存性」なのである。ブルジョア・イデオロギーの牧野では、この物象的依存性が自立化と見える。それは彼岸としての活動に自己を限定するからである。活動的疎外ではなく、疎外の状態にあるからである。

とはいえしかし、この客体的労働条件と主体的労働力との分離を強調することは、現実的生産・流通で現われる分離の止揚、すなわち同一性の回復を無視することを意味しはしな

い。これをわれわれは後ほど、労働過程と単純流通部面の考察のさいに見ることにしよう。ここではさしあたり、かくのごとき分離の止揚は、分離のなかでの、分離をうみだす同一性の回復たること、だから止揚の面に、同一性の面に視野を固定することは、またしても当然至極ではあるが、ブルジョア・イデオロギーの地平にさすらうことにならざるをえないのだと、指摘しておけば足りるのである。分離止揚のまず第一のものたる労働過程の特殊性を考察するまえに、まずもって、その特殊性をこそもたらす、ここであらわれた主体的労働力なる概念を検討しておこう。

二、主体的労働力とは何か

客体的労働条件から分離された主体的労働力とは何か。ある意味で『経済学・哲学草稿』での「疎外された労働」論以来の、マルクスの『経済学批判』の全努力は、この主体的労働力なる概念の彫琢にこそ傾中されたのだといえる。これこそ、『経済学』を『経済学批判』に跳躍させる鍵概念(キー・コンセプト)であるはずなのだが、労働と労働力の区別、労働力商品の特殊性を知っている現代のマルクス経済学(経済学批判ではない)も、主体的なる形容詞がついた労働力が、マルクスの用語だとは思ってもおぼえないことである。労働力商品は、この主体的労働力√の顕在的形態であるにもかかわらず。そのうえ、この概念を理解しうるはずの哲

しえず、対象的真理は常に彼岸にとどまったままなのである。かくのごとき主体性論の克服のために試みられているのが、主観—客観図式の超克というスローガンをもって登場した「物象化論」であるが、ここでも結局のところ問題は、共同主観性 Intersubjektivität なる後期フッサールの概念に象徴されているごとく、社会意識の物象化なのである。つまり関係意識の物象化なのだ。このように共同主観が物につかれた意識すなわち対象性に呪縛された社会意識(社会的分業が根因とされる)たるかぎり、そこからの解放は、またもや「対象性そのものを止揚すること」、絶対無への自己還帰となる以外にない。

すこしきざしりしてここでことわっておきたいが、私はマルクスの階級論は、階級意識論を問題にする必要をもたなかったものと考えている。マルクスにとって、意識はつねに支配的な意識、支配的階級意識として問題にされていることを思いおこさなければよい。主体的労働力√の発動としてある、労働すなわち対象化 Vergegenständlichung は、マルクスにとって、主観の客観化 Objektivierung としてではなく対象を持った対象的活動 gegenständliche Tätigkeit としての問題であった。それだからこそ、この主体的労働力を、『資本論』の労働過程論では「自然力」と名づけてもいるのである。フォイエルバッハの「対象性」規定の活動性欠如を克服し、返じてまたヘーゲルの、对象的・自然的土台から自

学分野においてさえ最近では、その理解を彼岸においやる努力がなされているかのようである。主観—客観図式の克服なるスローガンがそれである。こういつたからとて、私は何もマルクスのいう主体的労働力√なる概念が主体性論(いわゆる人間主義)にとつてのみ有利な概念だといっているのではない。即目的にはそうもいえない。だが主体性論で終始問題となっていたのは、個的意識と階級意識の関係始何の問題であって、結局、自己意識の悪無限でしかなかった。階級の自覚論をもって終息する「自然から分離されて形而上学的に改作された精神」(『聖家族』MEW. 2, s. 147)の暗闇を抜けだることができなかつたのである。マルクスの場合、問題となつていのは階級存在論である。あるいは存在論という呼び名が形而上学的印象をあたえるなら実践論といいかえてもよいが、むしろ形而上学を感じる方が認識論にとられすぎているといったほうがよい。それはともかく、マルクスの「対象的活動」の理解にかんして、人間も一個の対象であるからこそ、対象に働きかける活動があり、また逆に対象から働きかけられる活動がありうるのだという点を理解しえず、この対象を意識に現前する対象という意味でしか理解しなかつたのである。物質が千度叫ばれても、主体概念の構造を問(すでにヘーゲル、フォイエルバッハがそれを問題にしたのだ)、対象的活動あるいは自己活動 Selbsttätigkeit を主体としてとらえないかぎり、自己意識の玉座を脱却することはな

己を切離して天上に舞いあがりちな「外化」Entäußerung とその止揚なる概念を、同時に克服撰取して成立したのが、マルクス独自の対象化なる概念だと私は解している。この概念あつたればこそ、フォイエルバッハの影響下にあつた彼が、すでに『経済学・哲学草稿』の中で、驚異的ともいえるべき「労働√」の根底的構造把握をなしたのであつた。いわゆる主・客弁証法(主体性論)か、関係意識論(物象化論)か、といったマルクス哲学解釈をめぐる悪循環がどこから来ているのかといえ、主体と客体とが前提的に分離してしまっている関係のもとでの主体の客体化と客体の主体化、さらにいえば、この分離された主体の特殊構造こそ問題にするという根本視角をもたないからなのである。だから主・客弁証法が常にただ労働過程論(分離が見えない分離の下でのその止揚過程)だけを問題にし、また他方、関係意識論が同じくただ流通論・分配論だけを問題にする理由がよくわかるというものである。それらは常にマルクスのいう「私的所有の下での私的所有の止揚」とか「資本の下での資本の止揚」と、私的所有や資本の根本的止揚とを明瞭に区別しえない。すなわち分離関係を前提とし、この分離をさらに新しい形態で措定する分離の止揚=同一性の回復と、この分離関係そのものの根底的止揚(革命)とを区別しないのである。そこからは現実的・根本的分離関係を放置したままでの、意識の中の、観念の中での分離の止揚といった階級意識論しか生れ

はしない。そしてまたこの階級意識は、終局的には、商品所有者意識、私所有意識に類落せざるをえないものなのである。流通形態に対応する流通意識！

話が少々横道にそれすぎた感ありだが、マルクスの独自の客体的労働条件から分離された主体的労働力とは何か？という根本問題の理解のためには、少くとも以上のとき前置きが必要だったように思う。ところでマルクスは、『経済学批判要綱』で、この客体的労働力Vを、かなり難解な表現で規定している。これを逐一検討していこう。いうまでもないことだが、この『経済学批判要綱』でのマルクスはまだ、客体的労働力Vなるカテゴリーをカテゴリーそれ自体として、確立していない。しかし「労働」とか「労働力能」あるいは「労働能力」といった用語でその内容は十分に示されている。われわれはまず、これまでほとんどまともには取りあげられたことのない、この『要綱』の一節から検討しはじめよう。

「非資本家そのものとして措定された労働は次のようなものである、——

(1)、否定的に把握された非対象化労働（それ自身は対象的であっても、客体的形態では非対象的なものそれ自体）。このようなものとしては、それは非原料、非労働用具、非原料生産物であり、あらゆる労働手段と労働対象、その全客体性から分離された労働である。これら労働の實在的現

定態のことである。ただ単に対象化することに対する対象化しないことを意味しているのではなく、対象化という前提を持ちながら対象化していないこと、これがその意味である。こう述べてくれば、『経済学・哲学草稿』の難問中の難問とされるかの一節を人は思いださなだろうか。すなわち「ヘーゲルの『現象学』とその最終的成果とにおいて——運動し産出する原理としての否定性の弁証法において——偉大なるものは、なんとといっても、ヘーゲルが人間の自己産出を一つの過程としてとらえ、対象化 *Vergegenständlichung* を対象剝離 *Entgegenständlichung* として、外化 *Entäußerung* として、およびこの外化の止揚としてとらえているということ、こうして彼が労働の本質をとらえ、対象的な人間を、現実的であるがゆえに真なる人間を、人間自身の労働の成果として概念的に把握しているということである」（岩波文庫、一九九頁、MEW. Erg. 1, s. 574）と、うう一文である。ここで使用されている *Entgegenständlichung* の訳語をめぐって現在まで種々の論議がなされ、豊富な研究文献が積みかさねられてきたのであるが、この語は、いまここでわれわれが検討しようとしている「非対象化的」*nicht-vergegenständliche* という語と同一のものではないだろうか。つまり、両者が同じく「対象化」の否定態を示す意義を付せられているのである。ここで、これらの語の意味を理解する決定的な鍵は、すでにのべた「対象化」というマルクスに独自のカテゴリーの意味内容を

実性の諸契機の捨象として実存する生きた労働（同様に非価値）、これらの完全な剝奪、あらゆる客体性を失った、純粹に主体的な労働の実存。絶対的貧困としての労働——「この貧困は」対象的富の不足としての貧困ではなく、対象的富の完全な排除としての貧困である——。あるいはまた実存するその非価値として、したがってまた媒介なしに実存する純粹に对象的な使用価値として、この対象性は、人間から分離されていない対象性——その直接的肉体性に合っている対象性のみありうる。対象性が純粹に直接的であるために、同様にまたそれは直接的に非対象性なのである。いいかえれば個人そのものの直接的定在の外には合っしない対象性である。

(2)、肯定的に把握された、あるいは自己を自己に関連する否定性である非対象化労働、非価値。それは労働そのものの非対象化的、したがって非对象的、つまり主体的実存である。対象としてのではなく、活動としての、それ自体価値としてではなく、価値の生きた源泉としての労働。ここでは富が对象的に、現実性として実存している資本に對立した、行為そのものうちで自己確認する富の一般的可能性としての「一般的富」(Gr. s. 203)。

ここでいわれている「非対象化労働」*Nichtvergegenständliche Arbeit* はどういう意味だろうか。それは「非对象的」とはいわれない。非対象化とは明らかに「対象化」の否

を深く理解することにある。対象 *Gegenstand* を持ち、自己自身がまた一個の対象としてある主体 *Subjekt* の対象へ向かう活動、こうして対象の形態変化をおこす活動、これが対象化であった。これが、ここでは「非対象化」または「対象剝離」となるといわれているのである。つまりその意味は、対象化の結果としての、所産としての対象が、対象化する主体から独立して（ここまではまだ対象化のうちにある）、別の、主体にとってフレムトな（よそよそしい）対象となって、主体自身に對向してくることである。だから「非対象化」という「対象剝離」というでも、対象性 *Gegenständlichkeit* が、主体や対象から消滅することではない。対象性がないということは無であるということではない。この点はマルクス自身、明確にのべている。「対象のない活動は、無であるか、あるいはせいぜい……思考活動にすぎない」と(Gr. s. 178)。この「非対象化労働」という表現は、おそらく「対象化された労働」*vergegenständliche Arbeit* の対概念として考えられたのであろう。だからマルクスは、この種の労働を「労働の實在的現実性の諸契機の捨象として実存する生きた労働」*lebendige Arbeit* として規定しているのである。こうして「対象化された労働」Vと「生きた労働」Vとの對立関係を、きわめて明確に資本と賃労働（非資本）の對立、さらにいえばその実体的基礎たる客体的労働条件と主体的労働力の分離に根拠づけた、この『経済学批判要綱』では、客体的労働力V（对象的活動）の、

否定態を、『経済学・哲学草稿』よりも正確に定立しえたのである。

第一の性格規定たる「否定的に把握された非対象化労働」とは、 \wedge 生きた労働 \vee を徹底して「対象として」把握した規定である。つまり、さきにもべた生産者と生産手段との「肯定的な関連」が否定された面での生産者の規定である。だからこの「あらゆる客体性を失なった、純粹に主体的な労働の実存」aller Objektivität bare, rein subjektive Existenz der Arbeitは、「直接的肉体的に合っている対象性」つまりただ肉体的のみしか有していないのだから、「絶対的貧困としての労働」、「対象的富の完全な排除」である。 \wedge 生きた労働 \vee をこの面でのみとらえ、それを固定するならば、賃労働者とローマのいわゆるルンペン・プロレタリアとの区別はつかない。だがマルクスはそういう意味で第一規定を性格づけてはいない。それは「媒介なしに実存する純粹に对象的な使用価値」という規定からも了解される。とはいえ、ただ「使用価値」というなら、今度は奴隷との区別がつけがたくなる。いずれにしても、こうみれば、第一規定のみで、資本に対立する非資本としての \wedge 生きた労働 \vee を根本的に性格づけるわけにはいかない。第二規定が必要なのである。

第二規定の「肯定的に把握された、あるいは自己を自己に関連づける否定性である非対象化労働」とは、もはや「対象として」とらえた \wedge 生きた労働 \vee ではなく、「主体として活外、本質外化、対象剝離、現実性剝奪を自己獲得、本質変化、対象化、現実化としてとらえている」(岩波文庫、二二七頁、MEW, Erg. 1, s. 583~4)という一節である。これはまた、先に問題にした「対象剝離」なるカテゴリーの第二の使用例文として知られているが、こうしてこの一文と、今われわれが検討している \wedge 生きた労働 \vee の第二規定とを関連づけると、いわば一挙にヘーゲル・マルクスの労働概念の中核的思想を了解しうることになる。すなわち「対象として」把握した \wedge 生きた労働 \vee の「絶対的貧困」とは、「対象化を对象剝離としてとらえ」た規定であり、これに反して第二規定の「主体として活動として」把握した \wedge 生きた労働 \vee の「行為そのものの中で自己確認する富の、一般的可能性としての一般の富」der allgemeine Reichtum……als allgemeine Möglichkeit desselben, die sich in der Aktion als solche bewährt とは、「人間の自己疎外、本質外化、対象剝離、現実性剝奪を、自己獲得、本質変化、対象化、現実化としてとらえ」た規定なのである。

\wedge 主体的労働力 \vee すなわち \wedge 生きた労働 \vee の根底的構造はこうして「絶対的貧困」と「富の一般的可能性」との同一性、しかも自己活動する同一性たることが明瞭になった。「こうして労働が一方では対象としての絶対的貧困であり、他方では主体として、活動としての富の、一般的可能性、die allgemeine Möglichkeit des Reichtums als Subjekt und als Tätigkeit である。

動として」把握した面での \wedge 生きた労働 \vee である。生産者と生産手段との直接的・肯定的関連が、直接的に否定された相でのみ把握されるのではなく、二要因の「おのおのが他のものにたいして否定的な関連として現れる」さいの、つまり媒介された否定関連に入るときの生産者の \wedge 生きた労働 \vee の根拠が、ここでは問題にされている。「自己を自己に関連づける否定性」sich auf sich beziehende Negativität とは、いうまでもなくヘーゲルの『大論理学』中の本質論のカテゴリーであるが、ここではヘーゲルとマルクスの関係を探るのが問題ではないので別稿にゆずるとして、ただマルクスの労働概念の確立にさいしてヘーゲル労働論(『大論理学』では本質論なかでも現実性論と概念論中の客観論)が驚くほど深く介在していること、ヘーゲルによって体系化されるドイツ観念論哲学(なかでも同一哲学)の理解なしにはマルクスの \wedge 経済学批判 \vee は真に理解されうることはいえないし、また逆にマルクスのプロレタリアート規定こそが、ドイツ観念論によって思弁的に約束された事柄の実現を導くものたることを指摘するだけにとどめよう。「自己を自己に関連づける否定性」として見た \wedge 生きた労働 \vee を理解するに参考となる一節が『経済学・哲学草稿』中にある。「ヘーゲルは、自己自身に關係せられた否定の肯定的な意味 positiven Sinn der auf sich selbst bezogenen Negation を——またしても疎外された仕方においてではあるが——とらえることによって、人間の自己疎

るということは、いかなる点でも自己矛盾しない。というようりむしろ、あらゆる点で自己矛盾しているこの命題は、交互に自己制約し、労働が資本の対立物 Gegensatz として、対立的定有 gegensätzliches Dasein として前提され、また他方労働の側では資本を前提するという労働の本質, Wesen der Arbeit からでてくるのである」(Gr. s. 203)。いまやわれわれは所有と無所有、資本と労働が、外的対立ではなく、内的対立しかも活動的・内的対立において相互連関をもっていることを知るにいたった。ここでさらに、この内的対立が外的対立に展開する必然性、つまり内的対立の積極的・活動的止揚の必然性を把握するためには、次のことを理解しなければならぬ。すなわち、「主体として活動としての富の、一般的可能性」として \wedge 生きた労働 \vee が実存しているからこそ、資本は「対象的に、現実性 Wirklichkeit として実存している」富だということである。富の可能性と現実性が完全に、絶対的に対立しているのである。というのも \wedge 主体的労働力 \vee たる「価値の生きた源泉としての労働」die Arbeit……als die lebendige Quelle des Werts は、同時にまた「媒介なしに実存する純粹に对象的な使用価値」であって、この「使用価値は、生産物のうちには物質化されていず、およそ彼の外に実存しているのではなく、したがって現実的に実存しているのではなく、existent……nicht wirklich じ、ただ可能性 Möglichkeit としてだけ、彼[労働者]の能力 Fähigkeit として存在している」

のだから、労働者の側には現実性は完全に欠如している。現実性剝奪 *Entwirklichung* の活動が人生きた労働 \checkmark である。だからこそ、この可能性としての「能力」は、「資本によって懇望され、運動させられてはじめて現実性となる」。人生きた労働 \checkmark 、人生体的労働力 \checkmark は「一定の目的に向けられた、したがってまた一定の形態で自己を発露する生命力そのもの」 *Lebendigkeit selbst* なのであるが、現実性から切り離された、純粋な可能性としてしか実存してないために、「資本から運動をうけとってはじめて労働者の一定の生産的活動としての使用価値となる」(以上、Gr. s. 178) である。「一定の目的」も「一定の形態」も全て、人生きた労働 \checkmark 、人生命力そのもの \checkmark からはでてこない。それらは全て、現実性、運動を提供する資本の側からのみやってくる。だから労働者は、自己の人生命力そのもの \checkmark を、目的としてではなく手段として扱わざるをえないのである。目的と手段の転倒。

かくのごとく人生体的労働力 \checkmark の可能性と人生体的労働条件 \checkmark の現実性が完全なまでに、分離し対立しているということは、人生体的労働力 \checkmark が、純粋なデュナミス(可能性)、さらにいえば完璧なポテンツ(潜勢態)だということである。⁽¹⁵⁾ このような潜勢態としての人生体的労働力 \checkmark 、人生きた労働 \checkmark の側から見てはじめて、マルクスの次のごとき論述も正確に理解しうるのである。

「じつさい、偏狭なブルジョア的形態を皮むけば、富と産力主義 \checkmark であり、「総体的疎外」は、この進歩的側面の外的で余分な附録程度にしか考えられないであろう。このような人生産力主義 \checkmark にたいして、生産関係の階級性を対置してみたとしてもまだ何ら内的に批判したことにはならない。というのも生産力それ自体の根本的構造の剔抉という、必須の媒介がそこには欠如しているからである。ここでマルクスのいう「人間の創造的素質の絶対的創出」とは、人生体的労働力 \checkmark が、完全にその現実的実現条件(客体的労働条件)から分離されて、純粋な可能態、潜勢力として生成したことが根拠となっていてるのであり、またこの根拠に立ってこそ、かくのごときブルジョア時代の普遍性の謎も解きあかすことができたのである。「生成の絶対的運動」とは、既成のものたる客体的労働条件に立っては把握しえない。たとえ把握したにしても客観的な歴史的洞察、すなわち「理論的態度」としてのみ可能である。「生成の絶対的運動」は、この運動の主体的基軸をなす人生体的労働力 \checkmark にとってのみ、「実践的態度」において了解可能なものとなる。そしてこの了解は同時にこの運動の「総体的疎外」としての現実化形態の了解と不可分一体のものなのである。そういう意味で、マルクスはすでに以前に、「人間の存在は、彼の内面的な富を自分の外に生みだすためには、このような絶対的貧困にまで還元されねばならなかった」(『経済学哲学草稿』岩波文庫、一三七頁、MEW.

は、普遍的な交換によってつくりだされる個人の欲望、能力、享樂、生産力等の普遍性でなくてなんであろう。自然諸力——いわゆる自然の諸力でもあり、人間固有の本性の諸力でもある——にたいする人間の支配の完全な発展ではないのか。先行する歴史的発展は、発展のこの総体性、いかえると既成の尺度ではまったく測れないような、あらゆる人間の諸力そのものの発展を自己目的とするが、『宣言』とはこの先行する歴史的発展以外のどんな前提もたない、人間の創造的素質の絶対的創出、*das absolute Herausbekommen seiner schöpferischen Anlagen* ではないのか。そこでは彼は、ある規定性のうちで再生産されるのではなくて、彼の総体性を生産するのではないか。なにか既成のものにとどまろうとするのではなく、むしろ生成の絶対的運動 *die absoluten Bewegung des Werdens* のうちにあるのではないか。ブルジョア経済——そしてそれに対応する生産の時代——においては、人間内奥のこの完全な創出、*diese völlige Herausarbeitung des menschlichen Innern* は、完全な空虚化、*völlige Entleerung* として現れ、この普遍的对象化は総体的疎外として現れ、そしていっさいの定められた一面的な目的の廃棄は、自己目的をまったく外部的目的のために犠牲にすることとして現れる」(Gr. s. 387)。

ここでのマルクスの論述は、一見いわゆる人生産力主義 \checkmark である。ただ客観的にブルジョア時代を「自然諸力にたいして」(Gr. J. s. 380) と語っていたのであった。富の可能性と現実性が完全に分離し絶対的に対立しているとすれば、この富の活動的主体としての人生体的労働力 \checkmark にとっては、この分離・対立の止揚(根底的止揚)は内的必然、内的自由となるであろう。だが、この内的必然の発現形態、表出形態の検討を欠如している今この段階では、いまだわれわれはそれを抽象的必然としてのみ語るにすぎない。ひきつづいて次節では、主体的労働力と客体的労働条件との結合形態としての労働過程とその二重性について検討してみよう。なおことわっておかなければならないが、ここで検討した人生労働力 \checkmark は、使用価値に限定された面であって、まだ価値面は問題となっていない。この限定は意図的な限定である。というのも人生労働力商品化 \checkmark が、労働力というものの根本の本質の把握なしに語られる現今の傾向への批判が、問題意識の底にあるからである。

(1) これは、いわゆる「党派性論争」の両極であり、戦前では永田広志と加藤正がそれぞれの立場を代表していたといえる。戦後も宇野弘蔵氏の「科学とイデオロギー」問題の提起以来、種々の論議の対象になっているが、これら両極はいまだもって争われてはいない。それは当然のことである。というのも論争の枠そのものが、新カント派的認識論を出ず、相方が終局的には階級意識論(プロレタリアの形而上学)に収斂されていく必然性を持ち、この新カント派的認識論そのものがイデオロギーであるからだ。

(2) それぞれ、平田清明、廣松渉、望月清司、宇野弘蔵の各氏の代表的著作を参照されたし。私はこれら先学の業績の意義を高く評価するにやぶさかではないが、単に書評的な意義のみを賞揚するだけでは、現代の汎通的なイデオロギーたる価値相対主義におちいっているだけである。六〇年以後の論争がすべて中途半端なまま終焉していくさまは、論争上の原点の喪失を示しているものであり、それを文献的研究で越えることはできない。文献的研究の背後に姑息なイデオロギーを隠すのではなく、思想と思想の対決として論争が復活すべきではないか。その際の際の原則は、批判にはまともな答えることであって、無視または頬かぶりすることではない。かくのごとき原則、まことに常識的な原則を書きつけなければならぬのは、この原則を守らないのが、われわれのこの国での悪習だからである。例えば大きな業績を発表された平田清明氏にたいしては随分多くの批判がよせられているが、これらに対して氏は一向に返答されようとしていない。学問とはそれだけのものなのか。それでは大学批判がでるのも当然のことではないか。

(3) 拙稿「国家—市民社会—止場の構図」(『現代の理論』、七三年七月号)参照。

(4) 宇野理論における世界認識(『現代の理論』七二年七月号)でも書いたように、宇野弘蔵氏の「労働力商品化論とマルクスの「客体的労働条件と主体的労働力の分離」論をほぼ同一視してきたが、その後の研究の進展によって、全くの別ものたるものが次第に明瞭になってきた。その際の私の手がかりとなったのは榎原均氏の「宇野経済学批判——労働力商品化の矛盾」論を中心として——(『情況』、七一年五月号)であって、これは随分水準の高い力作である。本稿は、私の新しい地平での第一稿ともいえるものであり、これから宇野弘蔵氏の業績にたいする批判をしていかなければならないと考えている。

トの矛盾構造を究明しているが、私にはまだ充分なものとは思えない。労働力の特異な構造を徹底的に明らかにするには、藤本氏の依拠しておられるヘーゲル哲学そのものを検討しなければならぬからである。この点はさしあたり、本誌に連載中の拙稿「労働把握をめぐるヘーゲルとマルクス」を参照されたし。

(11) 対象化 Vergegenständlichung なる概念は、マルクス独自のものではないか。私の現在までに知るかぎりヘーゲル、フォイエルバッハには、この概念はないように思う。この点、識者の教えを乞いたい。

(12) ロマン・ロストドルスキーの「重要ではあるが、しかしまた理解困難な側面」(R. Rosdolsky: Zur Entstehungsgeschichte des Marxismus) Kapatik, Frankfurt, s. 228. 『資本論成立史』2、時永他訳、法政大学出版局(二九二頁)という一文をまともに取りあげたのは、唯一梯明秀氏の『経済哲学原理』(日本評論社、二一四頁、三三七—三八頁)のみであるが、氏の自覚論からの解釈が附せられている。なお大井正氏にいたっては、「非対象化労働」を「非対象的労働」と誤訳され(わざわざ、正しい翻訳があるにもかかわらず)、誤った解釈がほとんどされている。「いまここに非対象的労働」といわれたものが抽象的労働なのである」と。これではマルクスがわざわざ非対象化労働と抽象的労働を分けて説いた意義が無になるのではないか。(大井正『唯物史観の形成過程』未来社、四一—二頁)。

(13) これに關係しては細見英「経済学・哲学草稿」第三章稿(『マルクス・コメンタールII』所収、現代の理論社)を参照されたい。なお「対象対離」と「非対象化」とが同一のものだと指摘は梯明秀前掲書にもあるが、Entgegenständlichung の用例一の訳語に「自己外対象化」をあてられているのは納得しがたい。これは「対象化」がはじめから「自己外対象化」を意味することを理解されていないからである。いいかえれば梯氏

(5) 引用文献について。大月書店の『マルクス・エンゲルス全集』に所収のものは、すべて MEW の指示のもとに原書ページで示し、『経済学批判要綱』は高木幸二郎氏責任翻訳のものをこの指示のもとに原書ページで示した。なお訳文は随次変更してある。

(6) いわゆる「生産力と生産関係の矛盾」論というスターリン主義の客観主義的性格は、その背後にある voluntarisme (主意主義)をつきだすことなしに批判しても、きわめて無力なものとなるか、批判者の主観主義を示すものに終るかどうかである。

(7) いわゆる「所有論としての『資本論』」なる平田清明氏の問題提起には、マルクスの労働概念の考察が決定的に欠如している。たとえ労働概念が顔をだすとしても、自己労働とか他人労働といった、所有の立場からみた労働であって、活動としての労働ではない。これでは所有批判の原点なしの所有批判となり、ブルードンの、真正社会主義的水準への後退であろう。

(8) こういったからとて、私は「歴史—論理説」に立っているのではない。その点は形式的(論証のための論証)観点からみるのではなく、全篇にわたる批判をしていただきたい。

(9) 「まず第一に注目すべきなのは、労働者の場合、外化の、疎外の活動として現われるすべてのことが、非労働者の場合、外化の、疎外の状態として現われるということである。第二に、生産におけるまた生産物にたいする労働者の現実的、実践的態度(心の状態として)が、彼に対立している非労働者の場合、理論的態度として現われるということである。『経済学・哲学草稿』岩波文庫、一〇六頁、MEW, Erg. 1, s. 522.」この一文と「フォイエルバッハ・テーゼ」との関係は深いものがあるが、この点については後にのべる。

(10) 哲学分野では藤本進治氏の『革命の哲学』(青木書店、一九六四年)が、この「主体的労働力」を中軸にプロレタリア

にとつて「対象化」の主体は、どこまでも「人意識」なのであり、「意識の内と外の弁証法」が問題たるかぎり、「対象化」はマルクスに独自の概念たることを消極して、ヘーゲル化、あるいはむしろ西田化するのである。

(14) 「自分の外部にその自然をもたない存在は、なんら自然的な存在ではなく、自然の存在に関与しない。自分の外部にいかなる対象をもたない存在は、けっして対象的な存在ではない。それ自身が第三者にとつて対象ではない存在はいかなる存在をも自分の対象としてとらない。すなわち対象的なるまわらさ」(『経済学・哲学草稿』前掲、二〇七頁、MEW, Erg. 1, s. 578.)

(15) A. Schmit: Der Begriff der Natur in der Lehre von Marx, Frankfurt, s. 166. 元浜清海訳『マルクスの自然概念』法政大学出版局、二六八—二九頁。また花崎泉平『増補改訂・マルクスにおける科学と哲学』社会思想社、二二七—二二二頁を参照。だがシュミットも花崎氏も、客体的労働条件と主体的労働力の分離があつてはじめて、主体的労働力の潜勢態が明確になるのであり、そうであればこそこの可能性そのものが、現実性との関係における矛盾を止揚する必然性があるのだという点を明確に説かれているとはいえない。つまりマルクスはシュリンングに始まる Potenz 概念を現実的経済社会の矛盾を媒介にして批判的に止揚しているのである。この点の考察がまっしるだけである。個々人の内面的潜勢力なるロマンティズムが。(花崎泉平氏の『力と理性』(現代評論社)という論文集を参照されたい。)

労働と所有の分離 (下)

—マルクス階級論の核心は何か—

三、労働過程の二重性

△主体的労働力▽なる概念を掘りだし、規定しえた、われわれの△客体的労働条件と主体的労働力の歴史的・現存的分離のもとでの労働の根底的構造把握▽の次なる課題は、この分離された二要因の結合過程、いいかえれば同一性回復の過程である△労働過程▽そのものを考察することである。労働過程の考察は、一見すれば、すでにマルクス『資本論』第三篇に極めて鋭利かつ明解に説かれたことを拠点にして、容易になしとげられるかのようなものである。だが第三篇の叙述は、『経済学・哲学草稿』以来のマルクスの労働概念彫琢の苦闘の結晶であって、その結晶の理解が、結果的に、そう簡単

表

三 郎

(桃山学院大学講師)

に達せられるとも思えない。実際、ここで問題になるのは端的にいえば、初期の△疎外された労働▽と△労働過程▽の関係はどのような把握さるべきかということなのである。マルクス解釈の経済学的傾向と哲学的傾向への分裂とこれらの分裂を何とか縫合しようとして苦しまぎれに生れてたかのような「経済哲学」なる奇妙な折衷が渦まくなかで、労働概念の厳密な理解に達することは、そんなに容易な事柄ではない。折々にふれてきたように、マルクスの労働把握は、哲学の批判と同時に、経済の批判をもなすものであって、ヘーゲルともスミス・リカードとも、ある決定的な懸隔を有するものたるはずである。『資本論』第三篇第五章で説かれている「労働過程と価値増殖過程」こそが、たしかにこの懸隔を証した

ててあまりあるものなのだが、これまでの研究史にみられるかぎり、折角のマルクスの明解きわまりなき叙述も大して役に立つてはいないかのようだ。というのも、一方では△労働過程▽を価値増殖過程から切離し、自立化させて、「超歴史的」とか「歴史貫通的」といった風に規定したり、他方ではそれとは全く逆に、△労働過程▽を価値増殖過程に完全に吸収しつくしてしまい、「資本主義的」で、歴史的に独自のなものといった規定を付与せられたりする解釈が横行しているからである⁽¹⁾。

だが△労働過程▽は、単に超歴史的でも特殊歴史的でもない。それはいわば、超歴史的にしてかつ歴史的な過程、換言すれば自然過程であると同時に社会過程(市民社会過程ではない)なのである。だから「労働過程と価値増殖過程」とは、△労働過程▽の自己区分を意味する。マルクスがこの分割を概念的にも分節化してみせたのは、とりもなおさず人間の自然性を唯物論的に正確に把握することを基礎にして(つまり観念論的活動概念を克服することによって)、自然としての人間の特殊歴史的位相を解析するためであって、実体的に、自然的ものと社会的なものを並列化してみたり、あるいはまた同じく実体的にモノ的側面と価値的側面の区別をしたりのためではなかった。マルクスに従えば、△労働過程▽は二重の過程なのである。つまり△単なる労働過程▽であると同時に、△資本の下での労働過程▽である。われわれはこ

の二重性を可能なかぎり明確に把握しなければならぬ。そうしてこそ、かの△疎外された労働▽論が、哲学的粉飾をまとった未熟な初期的思想でも、人間主義に満ちみちた経済学⁽²⁾哲学でもなく、まさに哲学と経済学を同時に批判克服する巨人的思索の第一歩だったことが、はじめて明らかにするであろう。

a △単なる労働過程▽

労働過程の二重性を、われわれもマルクスと同様に、人間の自然性を際立たせる目的で、まず△単なる労働過程▽として考察しよう。たとえいかに、客体的労働条件と主体的労働力とが歴史的・現存的に分離させられ、主体的労働力が自己実現のあらゆる現実性 Wirklichkeit を剝奪された純粹の可能性 Möglichkeit でしかないにしても、ひとたび「資本によって懸望され、運動させられ」(Gr. s. 178)ると、△主体的労働力▽は「以前はただ潜在的に」potentia だけそうだった「活動しつづめる(自己を實現しつづめる)労働力、労働者」 sich betätigende Arbeitskraft, Arbeiter に「現実的に」actu なる」(『資本論』第一巻 MEW. 23, s. 192)。「生産過程では、対象的定在の諸契機——用具と材料——からの労働の分離 Trennung が止揚われ aufgehoben」(Gr. s. 268)るのであるから、△主体的労働力▽はいまや、可能性の相から現実性の相に、潜在性 potentis から顕在性 actus に移行している。つま

り、活動し、つ、ある労働力とは存在形態にあるものではなく、運動形態にあるものである。「労働過程とは、労働そのものをその創造的な活動の瞬間に im Augenblick ihrer schöpferischen Tätigkeit 考察したものにほかならぬ」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫版、四五頁、MEW. I, s. 26.)。「この過程で人間は自分と自然との物質代謝 Stoffwechsel を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御するのである。人間は、自然素材にたいして彼自身一つの自然力、Naturmacht として相対し、「この運動によって自分の外の自然、die Natur außer ihm に働きかけてそれを変化させ、そうすることによって同時に自然自身の自然、seine eigene Natur を変化させる。彼は、彼自身の自然のうち眠っている潜勢力、die in ihr schlummernden Potenzen を発現させ、その諸力の働き das Spiel ihrer Kräfte を彼自身の統御のもとにおく」(MEW. 23, s. 192.)のである。労働過程とはまずなによりも「人間と自然とのあいだの物質代謝を、したがって人間の生活を媒介するための、永遠の自然必然性」(MEW. 23, s. 57.)としての労働が現実的に現在進行形で過程しつづけるものである。

かくのごとき労働の自然性には、われわれは充分の考慮を払わなければならない。マルクスにとって「生きた労働」は、人間—自然の物質代謝の媒介、Vermittlung であり、いわば自然自身の自己媒介なのであるから、労働過程を理解するのに、「主体と客体の相互作用」といった何か曖昧な社会的形

なもの、形態変化、eine Formveränderung des Natürlichen をひき起こすだけではない。彼は、自然的なものの中に、同時に彼の目的—すなわち彼の知っている、法則として彼の行動の仕方の規定する、それに彼が自分の意志を従属させねばならぬ彼の目的—を実現するのである」(MEW. 23, s. 193.)。この一文だけを抜きだし、しかもこれを表層的に理解すれば、いかにもマルクスが労働の目的性を極度に高唱しているかのようなのである。実際これまでの労働過程研究、なかでも主体性論の系譜につらなるそれは、そのようなマルクスを好んで描くことによって、自己の問題意識をマルクスの加工してきた。だが「頭の中の」表象でさえ、自然過程から浮きあがって存在するわけではないことは、マルクス自身つとに強調していたことではないのか。目的 Zweck といっても、「自然的なもの、形態変化」の中での目的であることを忘れてはならない。実際マルクスは次のようにも論じているのだから。「人間は彼の生産において、ただ自然そのものがやるのとおりに行うことができるだけである。すなわちただ素材の形態を変えることができるだけである。それだけではない。この形態化の労働、Arbeit der Formung そのものにおいても、人間はつねに自然諸力、Naturkräften によって下支えされている」(MEW. 23, s. 57~8.)。だから労働の自然性、目的性は、この「形態化の労働」に含みこまれていたものなのである。ここに登場した「形態化の労働」というきわめて興味深い

象を悪定したりしてはならないのである。主体といっても、主体労働力なる過程の主体、それが自身が「一つの自然力」であり、客体的対象的存在なのである。「人間自身も、労働力の単なる存在として見れば、一つの自然対象、ein Naturgegenstand であり、たとえ生命のある、自己意識のある、lebendiges, selbstbewusstes Ding だといえ、一つの物である。そして労働そのものは、あの力の物的発露dingliche Auserundである」(MEW. 23, s. 217.)。つまり労働力、それが自身が「人間有機体に転換された自然素材、Naturstoff」(s. 223)であるわけだから、労働過程はまず何よりも自然過程、換言すれば、自然自身の自己媒介の過程なのである。

たしかに他方で、マルクスは人間労働の目的性にも言及してはいる。かの有名なくもや蜜蜂と織匠・建築師との差異にかんする議論である。だがマルクスの(3)労働の目的性が、(4)主客相互移行の弁証法の主唱者たちが考へるとき、労働の自然性を越えてた、人間に独自の目的性であるかどうか、これを検討してみよう。「もともと、最悪の建築師でさえ最良の蜜蜂にまぎっているのは、建築師は蜜蜂を蟻で築く前にすでに頭の中で築いているからである。労働過程の終りに、その初めにすでに労働者の表象のうちで、つまりすでに観念的に現存していた結果、ein Resultat... das beim Beginn desselben schon in der Vorstellung des Arbeiters, also schon ideell vorhanden bar が出てくるのである。労働者は、自然的

表現に注意してみよう。このように自然資料、Materie に対して、その資料交換の媒介たる労働を形態(形相)化 Formung と把握する観点は、すでに『経済学批判要綱』の単なる労働過程を論じた諸所に頻発したものであって、本当の出所はヘーゲル『大論理学』本質論中の「形式と質料」・「形式と内容」である。「要綱」でのマルクス労働過程論は、ヘーゲル『大論理学』を巧みに駆使しつづ、概念論中の客観性において「理性の狡智」といった風に天上に舞いあがってしまった。合目的、労働の概念を、むしろ本質論の質料的、自然的の観点に強固に結びつけるところに成りたっている。少し長くなるが、このことを立証する典型的な一文を引用してみよう。

「活動としての労働との関係では、素材、対象化された労働には、次の二つの関連があるだけである。つまり労働という形態措定的な、合目的な活動、die Formsetzende, Zweckmäßige Tätigkeit にとつての、原材料の、すなわち形態なき素材、formlosen Stoffs の、単なる材料の関連と、自己自身と対象とのあいだの主体的活動、die subjektive Tätigkeit が自から、その導き手としての対象を押し込んだ、それ自体対象的な手段の、労働用具の関連である」(Gr. s. 206.)。このような「形態措定的な、合目的な活動」と原材料と労働手段といった三要素の運動的連関が、マルクスのいう単なる労働過程なのであるが、この過程の結末は次のようになっている。

「原材料は、労働によって変化され、形態化され *geformt* することによって消費される。また労働用具は、この過程で使用され、使いつくされることによって消費される。他方では、労働もやはり消費される。労働は充用され、運動させられ、労働者の一定量の筋力等が支出され、これによって彼は疲れはてるからである。だが労働はただ消費されるだけではなく、同時に活動の形態から対象の形態、静止の形態へ固定され、物質化 *materialisiert* される。対象のうちでの変化として、それはその固有の姿態を変化させ、活動から存在になる。過程の結末は生産物であり、ここでは原材料は労働と結合したものと現れ、また労働用具は、労働の現実的導き手になったことによって、やはり可能性 *Möglichkeit* から現実性 *Wirklichkeit* に転化している。がそれとともに、労働材料にたいする機械的ないし化学的關係を通じて、それ自体その静止の形態に消費されてしまっている。材料、用具、労働という過程の三つの契機は、すべて中性的結果 *ein neutrales Resultat* —— 生産物に合体する。同時に生産物には、生産過程で消費されたこの過程の諸契機が再生産されている。だから全過程が、生産的消費として、すなわち無におわるのでもなければ、対象的なものの単なる主体化 *der bloßen Subjektivierung des Gegenständlichen* におわるのでもなく、それ自体がまた対象として措定されているところの、消費として現れる。消尽は、素材的なも

れ、この形態化労働が同時に「活動の主體的な」を物質化 (質料化) するものたることに気づかないのである。物質化が物象化に見えるのであろうか。たしかに「素材的契機は、それ自身においては質料 *Materie* (原材料および用具) と形相 *Form* (労働) として区別されているが、また両者間の関連としては、すなわち現実的過程としては、それ自体またもやたんに素材的関連 *stoffliche Beziehung* —— 資本としてのその形態関連 *seiner Formbeziehung als Kapital* からは区別された資本の内容 *Inhalt* を構成する二つの素材的要素の関連 *Beziehung der beiden stofflichen Elemente* —— にすぎない」(Gr. s. 209) である。労働の自然性に包含された目的性を、それだけ自立化させる見地は、必然的に、それ自体「素材的要素」としての労働の形相面を、「資本としてのその形態関連」つまり価値形態をその基軸とする商品形態と混同し、使用価値形成労働のうちに価値形成労働を読み込むことになるであろう。だがマルクスはそのような見地こそまさに「日常生活の宗教」たる物神崇拜とよんだのである。

とはいえ以上の説明だけでは、マルクスがさきさきの引用で「労働者は、自然的なものの形態変化を引きおこすだけではない。彼は、自然的なものの中に、同時に彼の目的……を実現する」と述べ、△形態変化▽と△目的実現▽を区別して論じている根拠を完全に了解しえるわけではない。この△形態変化▽と△目的実現▽との關係を、われわれとしても、も

の単純な消尽ではなく、消尽それ自体の消尽であり、素材的なものの止揚においてこの止揚を止揚すること、したがってこのもの措定 *im Aufhebung des Stofflichen Aufheben dieses Aufhebens und daher Setzen desselben* である。形態付与活動 *die Formgebende Tätigkeit* は、対象を消尽し、また自分自身を消尽するが、しかしそれは、対象を新たな対象の形態で *in neuer gegenständlicher Form* 措定するためのみ、あたえられた対象の形態 *die gegebene Form des Gegenstands* を消尽し、また自分自身を、活動としての自己の主體的形態で *in ihrer subjektiven Form* のみ消尽する。それが消尽するのは、対象の对象的なもの——形態にたいする無関心性 *das Gegenständliche des Gegenstandes — die Gleichgültigkeit gegen die Form* の活動の主體的なもの *das Subjektive der Tätigkeit* である。つまり一方を形態化し、*formt* 他方を物質化する *materialisiert*。だが生産物としては、生産過程の結果は使用価値である。(Gr. s. 207 ~ 8)

このようにヘーゲルの「形式—質料」論を徹底的に援用しつつ展開されているマルクス労働過程論は、質料的自然を一步も離れない、質料面に則した質料の形相化と形相の質料化である。つまり引用の最後にのべられているところに注意されたい。労働の目的性を度はずれに強調する論者たちは、「対象の对象的なもの」を形態化することにのみ眼を奪わう少し深く論じなければならぬ。人間と自然の物質代謝といっても、自然力に下支えされているかぎり、自然的物質代謝と離れてあるわけではない。△自然的なものの形態変化▽は、人間労働によって引きおこされるだけでなく、人間労働という媒介を離れて、自然的なものそれ自体によっても絶えず行なわれているのである。「労働の素材がだから解体にさらされているのだが、その解体は「過去に対象化された」労働を同様に解体するのである」(Gr. s. 265)。それゆえ、われわれは△形態変化▽という同一の概念(自然と人間の同一性の面からいえばこれは正しい)を使用しつつも、自然それ自体による形態変化と人間労働の媒介による形態変化とを明確に区別しなければならない。「労働過程で役立っていない機械は無用である。そのうえ、それは自然的物質代謝の破壊力 *der zerstörenden Gewalt der natürlichen Stoffwechselform* に侵される。鉄は錆び、木は腐る。……生きて、労働 *die lebendige Arbeit* はこれらの物をつかまえ、死から蘇生させ、それらをただ可能な使用価値から現実的かつ効果的な使用価値に転化させなければならない」(『資本論』第一卷、MEW. 23, s. 198) である。だが△生きた労働▽が、かくのごとき労働の対象化された自然素材(原料、労働手段)をその「無用性と消費減から守るのは、それを自己の目的に合わせて加工し、*ihrem Zweck gemäß bearbeitet*」一般的には新たな生きた労働の対象「客体」とすることによってだけである」(Gr. s. 267)。か

くして八目的実現Vが、単なる自然的物質代謝を媒介している自然諸力とは区別された、人間―自然の物質代謝を媒介する「生きて物を形づくる火」das lebendige, gestaltende Feuer (Gr. s. 266)たる八生きた労働Vの特性たること明らかである。人間労働の自然性と目的性は、だから何ら別のことではないのである。目的性と自然性を区別し、対立させるごとき理解は、人間の質料的自然存在たることを把握しえない観念論におちいらざるをえない。

これまでのべてきたことから了解しようように労働過程は、原料・労働手段・合目的的活動といった三要素からなりたっている過程である。マルクスの労働過程論において重要なことは、いままでに注目してきたように、それが人間―自然の物質代謝の過程たることであり、したがって、自然的物質代謝の時間的发展過程の一定の系として、この労働過程もまた時間性をおびていること、すなわちどの時代にも同じ労働過程があるのではなく、八単なる労働過程Vとしても、それは「自然史の、人間への自然の生成の、現実的な一部分」たる歴史(『経済学・哲学草稿』岩波文庫、一四三頁、MEW. Erg. 1, s. 544)をもっていることである。だから労働過程の三要素は、「人間の手を加えることなしに、人間労働の一般的な対象として存在する」大地を最深の根底としつつ、すべてみな「過去の労働によって濾過されている」のであって、なかでも「労働者によって彼と労働対象とのあいだに入れられてこ

の対象への彼の働きかけの導体として彼のために役だつ物または種々の物の複合体」たる労働手段は「人間の労働力の発達の測度器であるだけでなく、労働がそのなかで行なわれる社会的諸関係の表示器でもある」。だからこの「労働手段の使用や創造」が「人間特有の労働過程を特徴づけるもの」なのである。(以上、『資本論』第一卷、MEW. 23, s. 193~5)。

労働過程は人間の自然史のうちでも、自然的物質代謝と結合した最深層をなすものであり、それ自体歴史の土台として歴史の一部であって、決して「超歴史的」や「歴史貫通的」なものではない。技術史を念頭におけば、そのことは明々白々であるにもかかわらず、このような言辞(フラーゼ)が氾濫するのは、歴史を近代社会史に封じこめ、先行する歴史段階を未開の、切り縮められた自然に解消してしまふブルジョアの歴史観の根が強靱きわまりないものだからである。だがまさに近代社会の土台、その最深の土台をなしている八単なる労働過程Vは、「超歴史的」であるどころか、客体的労働条件のすべてから分離された八純粹に主体的な労働力V、かくの「ごときこれまでの全歴史の頂点に位置する」近代史の芸術作品」によって担われる八歴史的Vなものなのである。「資本主義的生産に先行する諸形態」にみられる「所有と労働の同一性」つまり労働の前提としての所有と自然生動的で狭小な人間―自然の一体性を、客体的労働条件と主体的労働力の分離の下で行なわれる同一性の過程の中に読みこんでは

ならない。ここでの八単なる労働過程Vは、一切の前提が「自然的または神授的諸前提」ではなく「労働の所産」(Gr. s. 376)となつてゐるまさに八歴史的Vなものであって、だからこそ「人間の創造的素質の絶対的創出」、「生成の絶対的運動」の基体 Substrat をなすものである。

とはいえ、この八単なる労働過程Vが、「資本それ自体の形態的関連」を含んでゐるといっているのではない。私は、マルクスの「経済的社会構成の発展を一つの自然的過程と考へる」立場は、八単なる労働過程Vと八資本の下での労働過程Vとを悟性的に分類したり、あるいは悟性的に混同したりするものではなく、まさにこの両者を二重性として、弁証法的に把握しうる立場だと理解している。それは、八単なる労働過程Vを先行する歴史的系列の総括として、分離の下での同一性の回復過程として把握することが同時に、八資本の下での労働過程Vを同一性の下での分離再指定の過程として把握することを可能ならしめる立場なのである。ところが悟性的な八日常生活の宗教Vにとらわれた古典経済学者たちは、この八単なる労働過程V(「分離が……実際に止揚される」過程『直接的生産過程の諸結果』国民文庫版、五九頁、MEW. 1, s. 38)を、「資本をあらゆる生産過程の必要な要素として説明するために固定化する」(Gr. s. 210)のである。物神崇拜者たちは、素材的連関の自然史の深層を理解するどころか、そのなかに社会的形態規定を意味付与し、ひるがえつては、

社会的形態を物的序列の中に押しこんで理解しようとする。

「経済学者の頭のなかでは、資本家の頭の中でと同様に、労働に對立するこれらの物の特定の社会形態と、労働過程の契機としてのこれらの物の実在的な規定性とが入り乱れており、互いに解けがたく纏着している」のであって、八単なる労働過程Vが「そのなかで労働が対象的な世界を、そして労働自身によって創造された……対象的な世界をわがものにする関係でしかない」(『剰余価値学説史』第三卷、MEW. 26 III, s. 260~2)ことを理解しえないのである。「彼らが不器用に物としてやつとつかまえたと思つたものが、たちまち社会関係として現われ、そして彼らがようやく社会関係として固定してしまつたものが、こんどは物として彼らを愚弄する」(『経済学批判』MEW. 13, s. 22)。彼らにあっては自然認識も社会認識も転倒しているのである。この八単なる労働過程Vの理解における転倒の典型は、「労働と所有の同一性」のスローガンをもって主張される八自己労働にもとづく所有V論である。

これは労働全取益権論ともよべるが、素材的富の源泉を唯一労働にもとめることによつて、自然的基底 Grundlage を抹殺し、その結果、市民社会的富と素材的富を混同するにいたる。だが労働価値説の創始者ベティのいうごとく「労働は素材的富の父であり、土地はその母」なのである。この種の混同の創始者はスミスであつて、彼は「自然的要素をまったく見すごし」た結果、「もっぱら社会的な富の、交換価値の領

域に追いこまれ、「価値規定の現実性をアダム以前の時代へ追いついた」た『経済学批判』(MEW. 13, s. 44)。この労働全収益権論はブルードンを経て、ラサールに流れこみ、やがてマルクスの影響のあるドイツ社会主義の綱領となって出現した。つまり『ゴータ綱領草案』である。マルクスはこのとき、この労働全収益権論を、かの自然思想ののりによって徹底的に批判している。「ブルジョアが、労働には超自然的創造力がそなわっているかのようなつくりごとを言うのは、はなはだもつともである。なぜなら、あらゆる社会状態と文化状態のもとで、自分の労働力以外になんの所有ももたない人間が対象の労働条件の所有者となつて他の人々の奴隷とならなければならぬのは、まさに労働が自然によって制約されている結果だからである」と、『ゴータ綱領批判』(MEW. 19, s. 15)。

かくのごとき「自己労働にもとづく所有」のイデオロギの発生基盤は、労働と所有の分離を自然的基底にまで降りたつて理解しえないところ、すなわち労働の客体的对象的諸条件の自然素材の規定と社会形態の規定との二重性を理解しえないところにある。客体的労働条件つまり生産手段(原料と労働手段)は、単なる労働過程においては、労働との同一化過程にあり、労働が生産手段を使用しているが、資本の下での労働過程においては、労働から分離し、生産手段が労働を使用している。つまり同じ生産手段が全く逆

立した二重の意義をもっているのである。われわれは、この生産手段の二重性をさらに詳細に検討するために次に、資本の下での労働過程を考察してみよう。

b 資本の下での労働過程

ここでは「労働過程は、資本家を買った物と物のあいだの、彼に属する物と物とのあいだの、「過程」であつて、そこで「労働者は、資本家の監督の下に労働し、彼の労働は資本家のものになっている」。したがつてまたこの労働の所産たる「生産物」は、もはやさきの単なる労働過程に現われたような「中性的結果」ではなく、「資本家の所有物であつて、直接生産者である労働者のものではない」(『資本論』第一巻、MEW. 23, s. 199~200)。というのも労働者にとつて、彼の主体的労働力は、資本家との交換に提供する前には自分の所有物であつたが(絶対的貧困)、資本家によって購買され、可能性から現実性へ、潜勢力から顕勢力へ移行するやいなや、その力の発露、つまり使用価値は「労働者にとつてのものではない」のである。「物の使用価値はその販売者そのものにはなんら関係はない」(Gr. s. 23)であつて、それは「資本家に属し」、「資本家は……労働そのものを生きた酵母、lebendigen Gärungsstoff」として、同じく彼に属する死んだ生産物形成要素に合体させ、こうして資本は「胸に恋でも抱いているかのように『働き』はじめる活気づけられた怪物」

となる(MEW. 23, s. 200, u. s. 209)。この過程では、生産手段はもはや労働者の生きた労働の非有機的体ではなく、「できただけ大きな量の生きている労働の吸収者」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫版、二九頁、MEA. 1, s. 16)なのである。

「もはや労働者が生産手段を使うのではなく、生産手段が労働者を使うのである。生産手段は、労働者によって彼の生産的活動の素材的要素として消費されるのではなく、労働者が生産手段自身の生活過程の酵素として消費する」のである(MEW. 23, s. 329)。

見られるように、この資本の下での労働過程では、前提として、歴史的・現存的前提としてあつた客体的労働条件と主体的労働力との分離が再肯定されている。しかもこの再肯定は、主体的労働力への生命発露たる生きた労働そのものに担われているのである。「所有と労働のあいだの、生きた労働力能とその実現の条件のあいだ、対象化された労働と生きた労働のあいだの、価値と価値を創造する活動のあいだの、こうした分離——したがつてまた労働の内容の労働者自身にたいする無縁性——こうした分裂は、いまや同じく労働それ自身の生産物として、労働それ自身の諸契機の対象化、Vergegenständlichung、客体性、Objektivierungとして現われる」。「労働の立場からみるならば、労働は生産過程で活動し、その結果客体的諸条件への自己の現実化を同時に他人の、実在性として自分からつきはなし、それゆえにまた、労働か

らは疎外されて労働ではなく、他人に属するこの実在性に対立して、自分自身を主体のない、たんに窮迫した労働力能substantzloses, bloß bedürftiges Arbeitsvermögen」として措置することになる。その結果また、労働は自分自身の現実性を対自的存在としてではなく、たんなる対他的存在として、したがつてまたたんなる他在、すなわち自己自身に対立する他人の存在として措置することになる。この労働の現実化過程、Verwirklichungsprozess は同じくその非現実化過程、Entwicklungsprozess「ため」(Gr. s. 356~8)。

の下での労働過程Vを論ずる時、必ずマルクスが疎外概念を基軸として論を展開していることに注目しなければならぬ。客体的労働条件と主体的労働力との分離、前者(客体的なもの)の主体化と後者(主体的なもの)の客体化という関係の逆立・転倒、かくのごとき事態は、マルクスの疎外概念なしには、別決しえないものである。マルクスの場合、この視点は『経済学・哲学草稿』(一八四四年)、『経済学批判要綱』(一八五八年)、『直接的生産過程の諸結果』(一八六三年)、『資本論』(一八六七年)と一貫してつらぬかれている視点であるが、われわれは、『経哲草稿』の「疎外された労働V論の検討の前提として、『諸結果』での疎外論をみておこう。

「労働者にたいする資本家の支配は、人間にたいする物の支配、生きている労働にたいする死んだ労働の支配、生産者にたいする生産物の支配なのである。というのも、労働者にたいする支配の手段(といっても資本そのものの支配の手段としてにすぎないが)となる商品は、じっさい、生産過程の生産物であるからである。これは、観念形態の領域において宗教のなかに現われる関係、すなわち主体の客体への転倒およびその逆の転倒 die Verkehrung des Subjekts in das Objekt und umgekehrt という関係とまったく同じ関係が、物質的生産において、現実の社会的な生活過程——というものはそれが生産過程なのだから——において、現われているものである。歴史的に見れば、このような転倒は、

挙に高みにおしあげる過程なのである。この『諸結果』での論述は、彼の最初の経済学研究の輝かしい成果たる『経済学・哲学草稿』の第一草稿「疎外された労働」において根底的に別決されたものの凝縮的表现にはかならない。かの初期草稿では、①生産物からの疎外②労働行為からの疎外③類的存在からの疎外(人間の本質からの疎外)④人間の人間からの疎外、という風に四規定をもって概念的に把握された「疎外された労働V」が、この『諸結果』では、あたかも第一規定のみ取り上げられているかのように見える。だがそう見える(疎外された労働論の循環論法といった初期マルクス批判がそうだ)のは、マルクス独自の弁証法的分析に盲目だからである。この「疎外された労働V」論は、「労働の客体的条件と主体的労働能力の分離V」を前提とした労働過程論と同じものであるが、ただ「労働過程の二重性V」を初期のマルクスが明確に区別していないがために、「労働過程疎外」というごとき、すでにのべた古典的ブルジョア経済学と同列の混乱(生産物の特殊社会的規定と実在的・素材的規定の取り違え、つまり物の人間化と、人間の物化)を、マルクス自身に帰する誤解が生じるのである。この四つの規定の内的関係をマルクスはどう把握していたのか。まず第一の操作は、私的所有を、主体面に則して疎外された労働として設定しなおすところにある。だから当然、「疎外された労働V」とは「私的所有V」の活動的・主体的本質を意味する。こうして、「私的所有

富そのものの創造を、すなわち、ただそれだけが自由な人間社会の物質的基礎を形成しうる社会的労働の無容赦な生産力の創造を、多数者の犠牲において強要するための、必然的な通過点として現われる。このような対立的な形態を通らなければならぬのは、ちょうど、人間が自分の精神的諸力をまず第一に自分に対立する独立な諸力として宗教的に形づくらなければならないのと同じことである。それは人間自身の労働の疎外過程 der Entfremdungsprozess seiner eignen Arbeit である。この点では労働者ははじめから資本家よりも高い立場にある。というのは、資本家はこの疎外過程に根をおろしてこの過程のなかで自分の絶対的な満足 seine absolute Befriedigung をみいだすのであるが、労働者のほうはこの過程の犠牲としてはじめからこの過程にたいして反逆的な関係 rebellischen Verhältnis に立っていてこの過程を隷属化の過程 Knechtungsprozess として感ずるといふかぎりにおいて、そうなのである」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫、三二—三頁)。

かくのごとくマルクスは資本・賃労働の階級対立の最深の物質的根拠を、自然—人間の自然史過程のグローバルな展開の中において理解している。資本・賃労働の対立は、「人間社会の歴史」を総括し、後史としての「自由な人間社会」へ至る、自然的な「必然的な通過点」であり、疎外過程とは、局地的に自然的に形成せられてきた人間の自然力を一

有Vの下では、労働者は労働の生産物から疎外されるという第一規定が導き出される。「労働の生産物が、ひとつの疎遠な存在として、生産者から独立した力として、労働に対立する」という第一規定から、第二、第三規定が導き出され、ふたたび第一規定に還帰し、そこで「疎外された、外化された労働」という概念が、現実においてはどのように表現され叙述されなければならないか」と問う構造、これが四規定の内的関連である。すなわち、根本的には「私的所有V」と「疎外された労働V」の相互関係を、生産物と生産者の関係に置き換えて内部連関を把握し、再度、この内部連関の外的形態たる「私的所有V」に還帰するという概念的把握、これははかならない同一関係としてある資本・賃労働関係の対立的側面を別決するためになされているのである。しかもこの対立関係は現実的表現をとっていなければならない。この現実的表現は、第一規定の末尾で「労働の、その諸生産物にたいする直接の關係は、労働者の、彼の生産の諸対象にたいする關係である。生産の諸対象および生産そのものにたいする關係である。生産の諸対象および生産そのものにたいする關係は、この第一の關係のたんなる一つの帰結にすぎない」と示唆され、これが第四規定で、全規定の総括として「人間が彼の労働の生産物から、彼の生命活動から、彼の類的存在から疎外されている」ということから生ずる直接の帰結の一つは、人間からの人間の疎外である。人間が自分自身と対立する場合、他の人間が彼と対立しているのである」としめく

トとしては自分自身をそしてそれとともに、彼をプロレタリアートとし、彼を制約する対立物を、すなわち私的所有を揚棄することを強いられている。それは対立の否定的な側面であり、対立自身における不安であり、解消された、また解消されつつある私的所有である。有産階級とプロレタリアートの階級は、同一の人間の自己疎外をあらわしている。だが前者の階級は、この自己疎外のうちに、快適と安固を感じており、この疎外が彼みずからの力であることを知っており、また疎外のうちに人間の生存の外見もっている。後者はこの疎外のうちに廃棄されたと感じ、そのうちに彼の無力と非人間的生存の現実性を認めている。それはヘーゲルふうの表現をもちいていえば、永罰のうちに、おける永罰にたいする反逆、in der Verworfenheit die Empörung über diese Verworfenheitであり、彼らの人間的本性と、この本性を率直に、断固として、包括的に否定している。彼らの生活境遇との矛盾によって、やむなくそこまでかりたてるところの反逆である。だから対立の内部では私的所有者は保守派であり、プロレタリアは破壊派である。前者から対立を維持する行動が生じ、後者からこれを絶滅する行動が生じてくる。」

(一)「超歴史的」は宇野弘蔵氏、「歴史貫通的」は内田義彦氏の命名になるものだが、奇妙なことに、両氏は理論的立場を異に

くられる。ここでマルクスが究明している事柄は、ほかならない労働過程(いうまでもなく資本に包摂された)そのものが資本・賃労働関係すなわち労働と所有の分離Vを生み出す階級関係の基礎だということ、これである。この階級関係がマルクスのいう「疎外された労働の現実的表現」であり、労働者と非労働者の関係として究明される。「労働者の活動が彼にとって苦しみであるならば、その活動は他の人間にとって享受であり、他の人間の生活のよるこびでなければならぬ。神々でもなく、自然でもなく、ただ人間そのものだけが、人間を支配するこの疎遠な力であることができるのである。」「労働者そのものとの関連において外化された労働を……考察」することによって、「この関係の産物として、その必然的結果として、われわれは労働者および労働にたいする非労働者の所有関係、das Eigentumsverhältnis des Nichtarbeiters zum Arbeiter und der Arbeitをみつけたのであった。」この所有関係とは、「対象の生産が疎遠な力、疎遠な人間のもとへの対象の喪失として現われる」関係であり、これこそが国民経済学の解明しえなかつた「私的所有の本質」、つまり「労働と資本、資本と土地とが分離される根拠」なのである。こうしてマルクスは階級関係を最深い基盤において概念的に把握する。「注目すべきなのは、労働者の場合、外化の、疎外の活動 *Tätigkeit* として現われるすべてのことが、非労働者の場合、外化の、疎外の状態 *Zustand* として現われると

いうこと」であり、「生産におけるまた生産物にたいする労働者の現実的・実践的態度(心の状態として)が、彼に對立している非労働者の場合、理論的態度として現われるということである。」

ここに、この階級関係のうちで何故労働者(プロレタリア)が、非労働者(ブルジョア)より「高い立場」にあるかの現実的根拠が闡明されている。つまりA状態VやA理論的態度Vより、A活動VやA実践的態度Vのほうが、高次の立場にあるのは、それがA生成の絶対的運動Vにある主体だからである。さらにいえば、マルクスがかの「フョイエルバッハ・テーゼ」に集約した直観的唯物論と実践的唯物論との対立も極言すれば、このA状態VとA活動Vの対立の哲学的表現にすぎない。だからこそ「古い唯物論の立場は市民社会であり、新しい唯物論の立場は人間の社会もしくは社会的人類である」とマルクスは喝破したのであった。

本節を締めくくるにあたって、先に引用した『直接的生産過程の諸結果』の「高い立場」にあるプロレタリアの反逆論をより生き生きと描いた『聖家族』の一節をあげておこう。

「プロレタリアートと富とは対立物である。……これは私的所有の世界の二つの姿態である。この二つのものが対立のうちで占める一定の地位が問題である。……私的所有は……対立の肯定的側面であり、自分自身に満足した私的所有である。プロレタリアートは、逆に、プロレタリアー

しつつも、この労働過程把握においては極めて近接した理解を示しておられる。さらに奇態なことは、これら歴史を超え、という名にもかかわらず、その労働過程論は一定の社会的表象を背後にしおぼせていることである。宇野氏のいわゆる本来的に、余剰を生み出す経済原則とか内田氏の対自然のうちに形成せられる人格的結合からなる生産力の構造(これが望月清司氏にならんと「労働と所有の同一性」といったブルードンの表象に純化される)とかがそれであるが、これらはいずれにしても労働過程の自然過程性を把握しえず、この労働過程にサン・シモン的な生産者像やブルードンの「抽象的な資本家」像を持ちこんだものである。また他方「資本主義的」とは林直道氏に代表せられるマルクス主義経済学者に共通の見解であるが、これは労働過程の内田氏的理解を価値増殖過程に浸透させ、たうえて、「搾取」を強調されるのだが、ここではA資本・賃労働Vが最も単純化して把握されるに至る。これらが現在の『資本論』理解の水位を示しているのだから、問題は多いといわねばならない。

(2)「人間の普遍性は、実践的にはまさに、自然が(1)直接的な生活手段である限りにおいて、また自然が(2)人間の生命活動の素材と対象と道具であるその範囲において、全自然を彼の非有機的肉体とするという普遍性のなかに現われる。自然、すなわち、それ自体が人間の肉體でない限りでの自然は、人間の非有機的身体である。人間が自然によって生きるということは、すなわち、自然は、人間が死なないためには、それとの不断の過程のなかにとどまらねばならないところの、人間の身体であるということなのである。人間の肉体的および精神的な生活が、自然と連関しているという、das das physische und geistige Leben des Menschen mit der Natur zusammenhängt、自然が、自然自身と連関して、leben und daß die Natur mit sich

ことは誤っているとわかった。『要綱』では全面的に、デュナミス・エネルギーといったアリストテレス的概念と可能性現実性といったヘーゲル的概念を使用して、△主体的労働力√の存在形態から運動形態への移行を表現していたのが、『資本論』になると、potents (潜勢力) — actus (現実性) が多用されるようになる理由が納得できなかったのだが、それはこういうことらしい。すでにマルクスが『要綱』を書きつつヘーゲル『大論理学』に再度傾倒しつつあった一八五八年にエンゲルスもヘーゲル『自然哲学』に沈潜して当時の自然科学の成果の総括に取りかかりつつあったが、彼が感銘のうちに指摘した自然科学の成果は、「細胞の発見」の他には「物理学における力の相関関係」(エネルギー転法の法則)であった(MEW. 29, s. 338)。エンゲルスの感激したウイリアム・グローヴの著書をマルクスが読んだのは、だが一八六四年になってからであった。「僕はグローヴの『物理的諸力の相関関係』を読む機会をえた。彼は無条件にイギリスの……自然研究者たちのなかで最も哲学的だ」・「著者は、機械的動力、熱、光、電気、磁気、化学的親和性がすべて、本来は、同一の力の形態変化にすぎず、それらは交互に発生し、交替し、相互に移行し合う等々ということを証明しています。「潜熱」……とか電気の「流体」等のような、うんざりするほど形而上物理学的な妄想……を、この著者はいとも巧みに斥けてい

くした」(MEW. 30, s. 333, n. s. 670)。このグローヴの著書から理解しえた「ポテンシャル・エネルギー」が『資本論』に姿をみせるのである。マルクスの使用する potentsia, potetia が「エネルギー転法の法則」に発するものたる根拠はエンゲルスが提供している(MEW. 24, s. 83)。つまり、マルクスは明確に△主体的労働力√を、自然科学の対象にも、(勿論それで尽くせるというわけではない)なりうるものと考えていたのであって、主体的労働力と客体的労働条件との間に位置エネルギーとしてのポテンシャル・エネルギーが働くものと考えていたのである。(『資本論』第一巻のグローヴの著書の引用参照。もっともその書名の訳は面白い、翻訳者たちの自然科学的知識を疑わしめるような誤訳であるが。MEW. 23, s. 549) 勿論マルクスの潜勢力がグローヴにのみ発するものでなく、やはりシェリング・ヘーゲルに源泉をおくものたること間違いないが、ただ以上の指摘は、ロマン主義風の観想的な潜勢力理解への科学的歯止めとしての意味をもっている。それにしても他の諸列からも知れることだがマルクスは彼の△経済学批判√の中で可能なかぎり、自然科学と人間科学の統一をはかるうとしていたのだから、この観点からエンゲルス『自然弁証法』草稿も再検討しなければならないであろう。

〔追記〕本稿は元の予定では、このあと四、所有権の二重性、五、賃労働の二重の自由と統けるはずであったが、今回の労働過程論にあまりに多くの原稿をついやしすぎたので、続きはまた別の機会に発表する所存である。〕

selbst zusammenhangt 以外のなにごとをも意味しはしない。というの人間は自然の一部だからである」(『経済学・哲学草稿』岩波文庫、九四一五頁、MEW. Erg. 1, s. 515~6)。③ 典型的にはルカーチ『歴史と階級意識』から遺著『社会的存在の存在論』までこの視点はつらぬかれて(る)であるが、主体と客体を恣意的に分離したうえで、これらを相互に關係させるようでは、主体はいずれにしろその対象性を欠如した観念的主体とならざるをえないし、同時に客体もこのような観念的主体の対象、換言すれば意識の対象であるかぎりでの対象とならざるをえない。かくのごとき主体と客体の弁証法とは、新カント派的認識論の枠を一步も出ようとしない△意識の内と外との弁証法√である。最近再び巷間を賑わしている現象学的存在論(その代表旗手は廣松渉氏)にしても、認識主体が復層化していることに相違があるだけで、基本的構造は同一である。例えば他者性 Anderssein, autrui にしつゝ「見る」ことの対象といったことしか意味していない。我国ではルカーチの観点は三木清の「人間学のマルクスの形態」(一九二七)に典型的に現われた。現在のエンゲルス自然弁証法の研読者たちには良い教訓となるものが、この三木論文に集約的に現われている。三木にとっては「歴史的世界」は「対象的存在界」ではなくして『交渉的存在界』であり、「人間は他の存在と動的相関の關係に立っており、他の存在と人間とは動的相関的にその存在において意味を表現する。存在は我々の交渉において現実的になり、そしてそれに即して我々の存在の現実性はお定である。かかる關係を有することがまさしく人間の根本なる規定であった、その故にこそ人間は彼の世界を所有する存在である」(『三木清著作集』岩波書店第三巻、十頁および三四頁)。ルカーチにしても三木清にしても、自己の自然、対象理解が、マルクス「フョイエルバッハ・テーゼ」によって批判された直観的唯物論の水準にしかないことに気づかずにながら、「素

朴実在論的思想から私を明確に決定的に分離せしめよう」などと豪語するのである。その行きつく先は意味付与的解釈学でしかない。なお現象学的存在論をつきつめたところから身体的存在論(メルロー・ポンティ)が出てくるわけだが、これは対象的世界から分離した非対象的な主体の対象性つまり終極的貧困としての主体の存在論ではない。前稿で詳しく論究した△主体的労働力√の否定性の面のみを、切離して検討しているわけである。これではマルクスのいう五感の形成自体が「対象的世界の実践的産出」にもとづくといった自然思想にいつまでも到達できはしない。

(4) 詳しうは Alfred Schmidt 'Der Begriff der Natur in der Lehre von Marx', II, III Kapitel 'Natur', in 'Marx und Engels über die Natur', in 'Marx und Engels über die Natur', in 'Marx und Engels über die Natur' (『経済学批判要綱』における人間と自然)『現代の理論』一九七二年二月)参照。

〔補論〕

マルクスのよくつかう△物質代謝√が、この自然の自己媒介を表現すること明白であろうが、このカテゴリが生理学からとられてきたように、マルクスの人間主義△自然主義の立場は、自然科学と人間科学の統一を、単に空虚な言葉としてではなく、真剣に探究している。ここに一つの例をあげておきたいが、それは我々の中心論点の理解に直接つながっている。前稿で、私は潜勢力 Potentia という概念を、それが『資本論』で登場する以前に問題にし、直接シェリングに結びつけて少々の示唆程度のことをのべたが、そののちの研究で、マルクスの使う潜勢力を簡単にシェリングとだけ結びつける